

平成29年度第2回 函館市観光アドバイザー会議 会議録

■ 開催概要

開催日時：平成30年2月2日（金） 18:00～19:30

開催場所：函館市青年センター 2階 第1クラブ室

出席委員：奥平座長，安井委員，池ノ上委員，渡邊委員，金道委員，飯野委員

欠席委員：外崎委員，内沢委員，尾山委員，木村委員，菊池委員

函館市：観光部長，観光企画課長，国際観光課長，観光推進課長

■ 次第

- 1 開 会
- 2 議 題
- 3 閉 会

■ 開 会

○奥平座長挨拶

このメンバーでの任期最後の会議となる。皆様と活発な議論を出来ればと思っているのでよろしくお願い申し上げます。

■ 議 題

(1) 報告事項

①平成29年度上期来函観光入込客数推計

事務局より資料に基づき説明。

(安井委員)

全体としては人数が減っている。8月・9月は前年比で特に減っているが、何か理由はあるのか。

(観光企画課長)

前年が北海道新幹線開業年ということで、特に上期は開業直後との比較になるので、落ち込みは少しあると考えている。開業前年と比較すると5%程度伸びている状況である。

②その他

事務局より資料「若松ふ頭整備関連の情報提供について」に基づき説明。

(池ノ上委員)

国交省の事業として実施しているものか。

(事務局)

事業主体としては国交省と開発建設部となっている。

(池ノ上委員)

資料は実際のふ頭の図面ではないので、わかりにくい部分もあるが、摩周丸はそのままその横にふ頭を整備するイメージか。

(事務局)

そのような計画だと今の時点では聞いている。

(池ノ上委員)

せっかくここに何千人規模で降りてもらうので、その後の動線を計画した方が良いのではないかと思う。車や大型バスなどが出入りすることになると思うが、この辺りは意外と使いにくい場所なので、何か計画が出来ればよいと思っている。

関係者に聞いたところ、40億円規模なので横浜のふ頭のような立派なふ頭ではなく、結構細い作りになると聞いているので、今後、周辺の混雑などの問題が発生する原因にもなるのかと思っている。受入側としての対応を考えておかないと、危険なことも含めて何か起こる可能性がある。

(奥平座長)

当初計画は若松ふ頭に直行する形でふ頭を伸ばす計画だったはずだが、途中で平行に変わっている。連絡船が隠れてしまうのはある。

現在、青森も大型客船栈橋の整備をしている。大きな立派なふ頭で、過去の貨物ふ頭を転用する形で新町、ベイブリッジの乗り口辺りのところから沖合に向かって伸びているところに栈橋を整備中である。リサーチし、この後の争奪戦に備えた方が良いのではないか。

(金道委員)

客船とは直接関係ないが、摩周丸の近くにふ頭ができるので、摩周丸を見に来るお客様がかなり増えるのではと予想される。摩周丸自体のリニューアルは計画しているか。

(観光企画課長)

リニューアルの話は今のところ聞いていない。担当の企画部に確認し、情報提供してまいりたい。

(金道委員)

個人的に見に行き、楽しく船内を見せてもらっているが、少し古い感じがするので、内部を工夫されるのが良いのではないかと思う。

(奥平座長)

例えば青森の八甲田丸は車両甲板まで見せている。ツアーが何コースもあり、ニーズに合わせて見学できる形となっているので参考にさせていただければと思う。

(安井委員)

クルーズ船に乗るお客様はどういう流れなのか。例えば、朝何時くらいに港に着くのか。そこから観光しに行くのであれば、バスがいるのか。観光が終わって船が出港するのは夕方なのか。出港後に函館の夜景を見ながら帰っていくのか。一連の流れを知りたい。

その上で函館にクルーズでやってきたお客様にどういう滞在をしていただきたいのか。先ほど動線確保の話もあったが、摩周丸の内部をみて素晴らしいと思ってもらえるようなことができればよいと思っている。

(国際観光課長)

寄港する時間は船によって異なり、すべて把握している訳ではないが、ほとんどは昼頃、11時頃に寄港して、手続きしてから上陸し、今は港町ふ頭と西ふ頭、少し離れた場所に来ているので、そこからバスやお客様によってはタクシーで駅前や五稜郭に行く動線もある。市内の観光地を回っていただいて、出港は夜10時頃が多い。

(安井委員)

入国手続きはないのか。

(国際観光課長)

ある。

(飯野委員)

聞いた話では、船の中で結構プログラムがあり、お客様は午前中に着いて昼を中心に観光し、夜は船に戻って船のプログラムに参加し、そのまま出ていく方が圧倒的に、

地方都市に寄港した場合は多い。決められた時間である出港1時間前までに戻らなくてはいけない。夜のアトラクションは客船のため結構充実しており、そこに合わせて夕方に戻るという方が話を聞いている限りでは多い。観光では夜の時間帯にどう過ごすかが中心になって来るのではないか。

(渡邊委員)

クルーズ客船のお客様は函館に泊まらない。JTB等が旅行商品を船内で販売しているが、何千人もの船で出てくる人は200から300名程度。うちでは一人3,000円でランチ250名の予約が入ってくるが、泊まらないので経済波及効果は少ない。他のまちに行っても同じような状況ではないか。

元々人数を受け入れられる場所があまりない。

(奥平座長)

ダイヤモンド・プリンセス級だと数千人もの規模になるので、ツアーに全ての人が行くとは思えない。逆に船に残っている人たちをまちに誘導していくのが一つ大事な部分ではないか。

パンフレットを見たことがあるが、オプションツアーの人数があまり多くない。1ツアーがバス1台くらいで5・6コース。そう考えると残った人の方が圧倒的に多いことになる。

(渡邊委員)

少しでもまちなかに近い方が、フリーで降りてくる方もいるだろう。

(池ノ上委員)

片道20分、往復40分の短縮は大きい。

(飯野委員)

急に気が変わって少しまちを歩きたいと思う方もいると思う。

東京にいるときに、飛鳥の研修をホテルで開催したことがあり、その時も話を聞くと、その手のツアー等は最低限で、可能な限り船内で全てが完結できるようになっており、料金ランクもすごい。一番安くても驚く値段の場合もある。フルボードと言って3食全部、あるいはスナックから全て含まれているので、船の中で過ごすことを楽しめるような方が基本である。渡邊委員がおっしゃるとおり、周辺の観光にとっては間違いなくプラスだし、それを考えたときに団体消費としてみるのではなく個人消費として見るべきだと思うので、朝市のエリアが営業時間をどうするのかを含めてあのエリアについて検討してもよいかもしれない。

(渡邊委員)

夜景がギリギリ見える時間に出港するので、花火大会とかも楽しめるのではないかな。今回、試験的になっちゃんWorldが冬花火に合わせて出港する。

(奥平座長)

客船を外から見ることはできるが、乗船は経験しにくいので、これから旅行の中で主流になっていく可能性もあると考えると、中で楽しんでいる人をどの様にまちに引っ張り出していくかを考えることが、経済的な波及効果として重要だという感じはする。

(安井委員)

こちらから乗り込むことはできないのか。お土産を乗り込んで売れないか。

(事務局)

乗り込むのは難しい。

(飯野委員)

海外になってしまうので。

(池ノ上委員)

外に仮設を並べて売ることにはあるが、若松ふ頭のスペースでは難しい。

(奥平座長)

大栈橋ではやっているようだ。

(飯野委員)

相当華やかにしないと。3軒とかではさみしい。

(奥平座長)

姉妹都市のハリファクスでは、15年前当時、クルーズ船が3隻同時に縦列で並んだことがあり、万単位で人が入って来る。夏場のバケーションシーズンになると、ウォータフロントは人でごった返す状況を思い出した。うまくするとそういうことができるかもしれない。

(池ノ上委員)

常設である朝市からベイエリアまでが滞留できるような空間になると動線が増える

かもしれない。

(奥平座長)

水産市場を築地市場の様に開放してはどうかという話をしたことがある。そうすると、客船に乗っている人も見に来るかもしれない。チャンスがあるのかもしれない。

(渡邊委員)

客船が入ると欧米人が増えるので華やかになる。

(飯野委員)

千人単位になると、金森倉庫の前の通りも開港通りも、国際ホテルもきれいになるので、華やかになるのではないか。

(池ノ上委員)

いきなりバスに乗るのではなく、歩いて出てきてくれるとよい。

(飯野委員)

歩きたい方もいるはず。船の中に運動施設はあるがどうしても船の中では歩きにくい。

(奥平座長)

船の中ではどうしても歩かない。

ハリファクスでは、客船が到着する橋のピア21という場所からボードウォークでずっと人を引っ張っていき、終点がカジノになっている。船の中にもカジノはあるが、歩いて運動がてら行くのがよいようだ。距離は2kmくらいで丁度良い散歩コースとなっている。

(飯野委員)

若松ふ頭から金森倉庫辺りまでがそのくらいの距離のイメージ。

(奥平座長)

その間の動線がどうなるかでこの先がだいぶ変わって来る。海が見えないのは残念である。

(安井委員)

八幡坂から客船が見える光景は写真映えする。

(奥平座長)

写真を撮るようになるだろう。船に乗っている人に宣伝すると、八幡坂まで来るかもしれない。

(池ノ上委員)

ベイエリアから昔の青函連絡船のふ頭までを整備することになりそうなので、もう少しきれいになるはず。そうすると人を引っ張れるかもしれない。

もう一度来てもらうことになるのと、泊まってもらえることにつながるので、いかに数時間の滞在でもう一度来たいかと思わせるかが重要である。

(奥平座長)

大きな課題だと考えている。整備までにはまだ時間がかかるので、その間に色々なところで議論が必要になってくるだろう。

(2) 今後の観光振興施策に対する意見交換

(渡邊委員)

この2年で共通の北海道新幹線開業に関わるか関わらないかというところで、一昨年、昨年で売上の比較をここ1年やってきたが、去年と一昨年との比較だと、新幹線開業年度には届かなかったが、開業前年と比較すると100%を超えている数字なので、結果的に伸びていると言えると思う。色々理由はあるが、新幹線開業を控えていたここ3年位で函館の露出が無料でできたというのが、PR費用をあまりかけずとも、新幹線が開業するとPRできたのが大きかったと思う。今年以降どうするかというところだが、うちの会社の話だと、平成元年、青函トンネル開業時に倉庫から現在の施設に開設してちょうど30年経ち、青函トンネル開通、新幹線開業を何とか迎えることができたが、この後の30年に何かあるかという、札幌延伸しかないようななかで、道南で何かあるかというと思いつかない。年間の観光入込客数が500万人に届いたが、さらに何百万人増えるのだろうかと考えたときに、2、3百万人増えることは正直ないだろうと思っている。少なくとも現在の入込客数を維持することを考えていかないと、人口が減り、お客様に来ていただいてもゴーストタウンだと思われるのは非常にさみしい話なので、これからの観光を考える上では、まず函館の人口を定着させなくてはいけないのかなと思っている。西部地区の空き家問題が新聞報道等で報じられているが、何か一つ職場ではない人が交流できるような場所を将来的にうちの倉庫だけではなく開発できればと自分の夢として思っている。

もう一つは、先ほどの客船もそうだが、新しいコンテンツを増やしていかないと、

いつまで経っても夜景一本のまちと言われてしまう。

(金道委員)

私は宿泊業、湯の川の温泉旅館対応のホテルだが、平成27年、28年、29年と3年間を見てみると、28年は北海道新幹線開業で大きい効果があり、お客様が増え、宿泊単価も上がった。この2つの効果により売上アップとなった。渡邊委員もおっしゃるとおり、29年はそこからみると落ちたが、27年より少しは良い状態を維持できている。28年の新幹線効果による宿泊単価アップは、通常よりも高い値段をつけて販売していたのではなく、それまで出ていた金額が低すぎたということで、28年に適正価格に戻ったのかと、ホテル・旅館がようやく普通のやり方で収益を上げられるような金額に戻ってきたと実感している。27年以前は、特に北海道は宿泊単価が安いのがネックであった。29年は集客は減ったが、単価を何とか維持しようという動きが函館の宿泊施設全体が頑張られていた雰囲気を感じる。そのことで新幹線効果がなくなったというよりは、単価を維持しながら収益体質を改善してこれている。今後もこれを続けていかななくてはいけないのかなと思っている。現在非常に懸念しているのが、宿泊の分野を見るとバリエーションが増加しており、民泊やゲストハウスなど多種多様な宿泊が選択可能になってきていることだ。消費者の方が今後どういう風に使われて旅行されるのかが気になっている。6月から民泊新法により条例でも取締りをされるが、これがどうなっていくかが不安である。今日もここに来る前にAirbnbの加盟施設を見てきたが、143件ほどあり、ざっと目を通したが、大半が違法ではないかと思われた。今後、違法な施設の取締りというところは力を入れていただきたいと思う。民泊に関して、私は個人的にも大多数の宿泊施設もそうだと思うが、民泊のルーツであるオーナー滞在型で、オーナーの元に泊まって、その地域の文化を体験したり、オーナーとの交流を楽しむような民泊は大賛成である。後はゲストハウスで土地の文化を感じられるのも良いと思っている。まずいなと思うのは、違法はもちろんだが、民泊マンションのようなホテル一棟を民泊の売り方で簡易宿泊所だけで売ってしまうやり方は非常にまずいと思っている。ホテルとどこが違うのかという問題が出てくる。我々旅館・ホテルは旅館業法というハイスペックな法律によって、経費と労力と時間をかけて運営している。それで安心安全が保障でき、その分金額が割高になってしまう。そういったところでやらせていただいているので、民泊マンションの様なところと勝負になると、正直価格で勝てない部分もあり、競争において平等ではなくなるということで、合法であっても民泊マンションは困ると考えている。

宿泊のバリエーションが増えると同時に、ホテルが1,500ルーム以上増えるという話を聞いている。入込客数が今後増えていくかという難しいなかで、宿泊のルーム数だけが増えていくと、当然供給過多になり宿泊単価が下がってきて宿泊が非常

に安くなってしまう。入込客数が増えない中で、金額が安く抑えられてしまうと、函館の経済効果が単純に減ってってしまうことを恐れている。その辺を函館市の調査や民間の考え方があれば教えていただきたい。独自にシミュレーションしたりもしているが、わからない部分もある。

不安が大きいですが、新幹線効果により恩恵を受けたので、この効果を何とか長い間持続させながら、少しずつ設備投資も重ねながら、お客様に満足していただけるような施設を作り続けていきたいと思っているが、何分自分たちの力でできること以外のところでの変化がこの業界で非常に大きい。ここを不安視している。

(飯野委員)

私は途中から参加させていただいた。主に2点話をさせていただく。1点目は、今の不安の裏付けというところで、何のための観光かと考えたときに、この地域に住む人たちが幸せにならないと、観光本来の目的は果たせないのではないか。その中で、金道委員よりホテルの話もあったが、何が起きるのかなと言うと、1,500室が増えることによって、繁閑の差が激しいまちで、繁忙期の価格が下がる。ある程度閑散期の値段が上がることによって、一年を通して比較的安定して価格で売ればよいが、現状2/3が上期に集中しているなかで、繁忙期の値段が下がるのは宿泊施設にとっておそらく立ちいかなくなる企業が増えるのではないかと。一方でもちろん繁閑の価格差があることが良いとは決して思わないが、となると雇用が確保できない。人手不足と言っている中で、さらに良い人材を育成しようとする気持ちがあったとしても、体力的にできないというマイナススパイラルができてしまう。これこそが一番観光業界にとってボディブロー的に効いてくる。金道委員が抱えている漠然とした不安というのは、やはりそういったところに起因すると思う。設備投資という意味でもすべて体力、イコールお金が必要というところでの漠然とした不安を抱えている宿泊事業者が私も含めて多いのではないかと。

2つめの、その中でどうするのかという方がより大事だと思っている。先ほど渡邊委員が新しいコンテンツの話があったが、非常にこれは重要で、ただやみくもに新しいものを作るというよりは、今あるものの見せ方の工夫も含めた新しいコンテンツが必要だと思っている。一方で、函館に何があるかを私なりに考えると、どうやって滞在型を増やしていくかに活路を見い出していく。年間で500万人もの人達が、仮にもう1泊ずつ滞在を増やしたらということで、経済効果はシミュレーションできていないが大きいと思っている。その中で、旅の目的として休息というのも大きくあり、日本人の旅行タイプは旅を満喫するだけして、家に帰って家が一番という旅行タイプが多い中で、私自身東京から来て12年目に入るが、函館で非日常空間で日常を楽しむ旅のあり方といった形で、これはなかなか行政が提案するのは難しいと思うので、宿泊施設で例えば温泉があるところないところを含めて、いわゆる東京なら東京でや

ることを逆に函館に持ってきていただく。そして滞在していただくといったときに、函館というまちはすごく魅力がまだまだあるような気がしている。私どもの施設には割とリピーターが多いが、昨年も九州大学の教授の方が1週間泊まり、毎日市電とバスの1日券を購入し、6泊では足りないと言って帰っていかれた。ということは、色々やり方はあるのかなと。そこに今年は活路を見出して行こうと考えている。スイス人のお客様で2週間泊まってくださる方がいる。毎年ではないが、3年に1回ほど。ということは、もしかすると、滞在型、しかもいることを楽しむ滞在型というものを、楽しむという観光はいろんなものが今進んでいると思うので、ゆっくりするということをもう一度、商品としては実は価値があるのかなと思っている。ただ、いわゆるキャッチーではないので、その辺をどうしても工夫していかなくてはいけないと考えている。人口も増えない、来訪者数も増えないことが予想される中で、どれだけ長くいてもらうかというのを考えていきたいと事業者として思っている。

もう1点は、観光人材を育てるまちに函館がならないかと思っている。人口を増やすのが急務と言えど、なかなか人が増えないので、生まれて次の年に産業人口になればよいが、それは無理なので、となるとそれまでの15年20年のスパンで考えたときに、どうやって観光地としてのブランドを使いながら、そこに人を呼ぶのかといったときに、3年5年いてくれる人を増やせないかなということも考えている。隙間をうまく埋めて、長期の考え方でどこかでリンクできればと思っている。

不安は本当に金道委員と同じくらい、非常に悩ましいことが多いが、函館の魅力をどうやって活かせるのかをもう一度真摯に考えていかなくてはいけないと思っている。

(安井委員)

本会議を通して勉強させていただく事が多かった。それとともにこの4年間でもずっと新しい課題に皆さん取組んでいると思い、常に新しいことに対応していくような、そういう意味では色々な課題はあると思うが、函館のまちのなかにもっともっと活気があるというか、大きな流れの力を感じるようなものがあつた。課題はあるとしても長い目で見れば成長してきていることもあるので、函館を引っ張ってきている業界になるよう頑張っていたいただければと思っている。

例えば、お客様目線というか、観光客の目線に立ち、モノや施設だけにとどまらないようなサービスデザイン、サービスに対するいろんなことをしていただければと思う。私もデザインの視点で何か貢献できないかと考えている。

(池ノ上委員)

常に言わせていただいていることは2つ。1つは尖った戦略を立てないといけないと思っている。2年間色々関わらせていただきながら、基本計画も勉強させていただいたり、新幹線開業に向けた動き、以降の動きも皆さんに教えていただきながら、あ

るいは、それ以外の観光に直接関わらない部分も含めて、まちづくりだとかまちのいろんな動きもを見せていただいている中で、特に観光の行政等の取組みを含めて見せていただいていると、一つは数値に関する情報収集は結構一生懸命色々されてきているのかなと思うが、それが結局民間で頑張られている方や今後行政としてどんな公共施策を立てていくのかというところにもっと直接響いてこないといけないと思っている。その様な意味では、今の数値の情報が本当に充分なのかどうかとか、分析の仕方をもっと開発していかないといけない。函館流に開発していかなくてはいけないのかなと考えている。皆さんおっしゃるような課題が見えているのに、数値とどうつながるのかがまだまだ開発不足かと思っている。そういう意味では、そういうことをしっかりとペルソナ分析も以前言われていたが、動態も含めてうまくリンクしていくようなプロセスをしっかりとしないといけないのではないかとと思っている。これは専門業者に任せればよいのではなく、民間の事業者や市民と対話をしながら、ワークショップ等、その数値を分析していったり、どんな数値があれば次の事業に関われるのかなど。個別の事業に関わる部分はそれぞれ個々でやられているのかもしれないが、地域として共有できる要素もあると思う。その辺の分析の仕方や調査の仕方までもしかしたら入っていったらよいのかもしれないが、そういったものをしっかりと積み上げたりしながら、一方で数値が出てくると、前回も話させていただいたが、函館としての観光の構造みたいなものが見えてくるのかと思う。どこが強いのかが見えてくるのかと思う。どこが強いのか、どこが弱いのか、あるいは分布の気密性だとか、今後の動きを見据えたときに、ここはやはりもう少し強化していかなくてはいけないのではないのかとか、向こう2、3年はこの部分にお金や人や労力を投下していかなくてはいけないのかということが見えてくると思うので、そういう積み上げをした中で、尖った戦略を立てられるとよいのかと思っている。おそらくそれは飯野委員がおっしゃったようなゆっくり滞在型に函館の観光が展開していくんだと、きっとそれは基本計画に書かれている話なので、それを具体的にどう進めていくのかというアクションプランも含めて、戦略を作っていかななくてはいけないのかなと思っている。

もう一つとしては、戦略を立てて、後は民間ががんばってくださいだと今までの形と変わらないので、個々に色々な光る函館らしい力がたくさんあると思う。民間事業もそうだし、行政も、大学も手伝えるかもしれない。そういうものを総合化できるような力とか、地域として向かっていくような方向に向かっている色々な力をマネジメントしていく力、結集させるような力、あるいは次こそ頑張ろうねとみんなを誘導していく力、そういういわゆるDMOと呼ばれるものかもしれないが、そういうものを作っていないと、個々の対応だけでは大変なので、先ほど民泊の話もあったが、個別で頑張れよと言うのはやはり酷だと思う。民泊マンションのようなものは、京都でも問題視されており、結構函館と似たような環境なのかと思い、今年の夏にゼミ合宿で京都へ行き、そういうものを調べようとみたいなのもさせていただいた。地元

の龍谷大学などの大学は、地域の人達と一緒にそれとどう対応するかをしているので、先進的な事例みたいなものを。例えば京町屋があるところなんかは、結局民泊で使えない、すぐ使えない、投資がたくさん必要なところはどんどん壊されていっている。これまでの活用があまりされていなかった時代よりも京町屋が壊される数がすごく増えている。そういう地域のストックがどんどんなくなっていき、逆に民泊は安物の数年で回収できるようなビジネスモデルなので、安アパートのようなものがどんどん作られている。そこによくわからない人たちがいっぱいいる、不特定多数の人が暮らすという、都市のストックとしてのレベルが下がっているし、地域の安全性も低下しているし、コミュニティの力もそこで抜けていってしまうので、コミュニティの崩壊にもつながっているという事例が結構ある。それにどう対応するのかというの、宿泊業者が個別に対応するレベルでは無理だと思う。地域として考えていかななくてはいけないのかなと思う。耐震にどうやって対応していくのかだとかそういうのも函館を背負ってきた民間事業者の方々がどうやって今後も頑張っていけるのかというのを一緒に考えるのが函館のやるべきことかと思う。これが東京位だと個別に切磋琢磨していけと言う話もあるかと思うが、やはり今後の函館の宿泊業のあり方をどうやって見つけ出していくのかということに、いろんな力を注ぎこんで研究・開発していくことをやっていくのも必要なのではないか。それから、それはきっと行政だけでもできないし、個々の民間事業者だけでもできないので、いわゆるDMOと呼ぶかどうかは別に、そういう組織というか機能みたいなものがあると、今年はこのことをやっていきたいと思いますと言う話を3年間くらい頑張っていくということになる。そういうことができる、少し今抱えているようなかなり深刻な不安を解消できるのではないか。渡邊委員がおっしゃるとおり、増加することをいくらマーケティングしたところで、予測として出せない。もしかしたら増加するかもしれない。けれど基本的にはいかにこの数の維持をしながら質を上げていくかの戦略をとるのが一番無難であるべき姿だと思う。そのためには少し高度ではあるが、今まで個別にやってきたことではできなかったことを少し上に積み上げた形でできる機能形成をしっかりと使っていかないと、もう対応できない時代になるのかなと思っている。

(奥平座長)

コンテンツと言えば、20年前に市民からの盛り上がりでできたのが、クリスマスファンタジーである。官主導ではなかった。青年会議所当時の理事長が、人生をかけて行ったということで知られている。私も青年会議所のメンバーだったのでよく知っているが、当初、青年会議所のメンバーだけで回していたので、人が足りず何とかしたいと思いついに市役所に頼み、4年位で市が参画する実行委員会の事業となった。そういう形でクリスマスファンタジーが続いている。民間のままではおそらく続いていなかったらう。民と官の役割の部分がよくわからなくなっているなという部分はあ

る。クリスマスファンタジーは20周年だが、クリスマスファンタジーオンリーになっているのではないかという部分を感じられる部分はある。その部分を次の新しいコンテンツは何なのかというところを、例えば夜景の日を復活させてもよいのかと考えていた。人口が減っているということで、特に西部地区の人口が大幅に減っているので、光量がどんどん落ちている。夜景の日みたいなイベントで市民にそういう意識を持ってもらう様な方向性ももしかしたら必要なのかもしれない。だめになったお祭りでも、これが実はいいお祭りになるかもしれない。ちょうど夜景の日は8月13日、お盆なので、お盆にご先祖様をカーテンを開けてお迎えしようという形でもよいと思う。もしかしたら市民にアピールするのもこれから必要なのかなと思う。

もう一つは、この観光アドバイザー会議が以前シンポジウムを開催していたのをご存知だろうか。2月末に市民向けのシンポジウムを開催し、観光をどう考えるかを市民の皆さんに対し問題提起をしていた時期があった。それを復活させるのもよいのではないかと思っている。例えば基調講演でどこかのまちから人を呼んできて、こんなことをやっていますとなると、コンテンツの発掘につながるのではないかと感じている。外からの意見を入れ、その後ワークショップに展開してもよいと思う。現在、市民が観光のまちだという意識をあまり持っていないのではないか。観光客はたくさんいるけど関係ないからと思っているようでは、おもてなしにならない。そういったところの迷い、市民意識の啓蒙、レベル上げというものを、この会議自体も担うことが出来るので、先ほどDMOの話もあったが、DMOの先駆けとしてこちらの方が動き始めてもよいのかと思う。

観光庁がしきりに言っているインバウンドが増えたので夜のまちを何とかしようという話が出ていると思う。フェスティバルタウン構想である。函館の冬でやるのはきついとは思いますが、昔やっていた私たちの世代は知っていると思うが、夜市、台湾のようなことをやっていた。毎週末必ずどこかの商店街がやっていた。それは実は大人も子供も、子供が出てくるので大人もついてくる、大人も一杯飲んで帰るようなこともある。そうすると、いわゆる経済波及効果が見込まれることもある。それに外国人の方が混ざれば、それはまた新しい観光資源にもなり得る。それができると、美しいまちづくりの基本計画では、フェスティバルタウンも出ているので、それを実現していく、もしくは方向性と重なるのではないかと感じている。

先ほどの観光入込客数の数字の中で、ヨーロッパが少ない。違う会議で飯野委員とも話していたが、そろそろアジア以外のヨーロッパや中東へのプロモーションをという話をし始めた。中東は若干入ってきている。そうすると、ハラル対応が遅れているのが函館観光の現状で、ハラル対応をどうするかという勉強会も今後もしかしたら必要なのではないかと考えている。そうすると、食品科がある大妻高校や函館短大の先生・学生に協力いただき、これがハラルですと紹介できれば、イスラム圏も少し身近になる感じがする。全国各地の観光地ではハラル対応を急いで、とにかく中東からの

観光客を呼ぼうという動きが活発化している。函館もそれにのらないといけないのではないかと思うので検討いただくのもよいと思う。大型客船にもたくさん乗って来るので、その部分も考慮する必要があると感じている。

最後に、観光人材の育成についてだが、観光ボランティアガイドの育成はいよいよ軌道に乗り始めた。次は何かというと、市民の意識向上と本当に観光を支える人材をどういう形で作り上げていくのか、システムを考えていく時期に来ていると思っている。学校を誘致するのは大きな話で、人口が減っていくようなところに果たして来るかどうかかわからないが、観光都市に観光学校が無いのはどうかと思う部分もあり、そういったところでいうと、観光学部構想があってもよいかと思う。函館が不思議なのは、構造自体が昔のままである。かつての工業都市時代の名残が未だに残っている。そのため理系の大学がやたら多い。理系の大学が多いと困ることは、地元で働く場所がないという問題が出て来る。そう考えると、昔の流れをそのまま引きずっていつているために、何となく人材を育成できていない部分があるのかなと感じている。そういったところに目を転じてみるのももしかしたら面白いのかと思う。

他にも、おもてなしの有料化もある。たくさんのオプションツアーを作りました、これはいかがですかとお金をとる。お金をとるという発想を少し持たないと、おもてなしは続かないので検討する必要もある。

あまり知らない数字かもしれないが、青函圏4都市、函館、青森、弘前、八戸、この入込客数を足すと2,300万人となる。北海道の観光客数に匹敵する規模になる。津軽海峡をぐるっと回るだけだがこれだけの人がいる。これをどう回すのかをこれからの4市長会議で考える部分かなと思う。4市長会議でもいろんな発案が出ると思う。その発案をどの様にしてこういった会議で活かしていくのか情報提供いただければと思う。弘前市長は函館高専を出て物凄く元気な方で、弘前ナイトでクリスマスファンタジーを1日貸切っているほど。青森は逆にまち歩き関係で函館との連携を強めつつあるので、そう考えるとこれからももしかしたらおもしろいのかもしれない。そういった情報を発信するとともに情報を提供いただければと思う。

(観光部長)

本日は、足元の悪い中、お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。また2年間、非常に忌憚のない意見を頂戴し、活発なご議論をいただいたことに改めて厚く感謝申し上げます。基本計画に沿って進めているところであるが、例えばインバウンドの数値にしても、もう既に超えているような状況もあり、中間でいろんなことを見直す前に、こうして皆さんからのご意見をいただきながら、常に軌道修正をしたいと考えている。奥平座長にお話しいただいたが、我々も大きな課題を抱えているということを認識しているので、これからも業界の皆様、有識者の皆様、お話のあった市民との対話もしながら色々と確かめていくこともあると思う。もちろん観光客、国

内・国外のニーズを拾いながら、分析の仕方もよく注意し、研究をしながら施策、観光消費につながる、そして消費につながるだけでなくそれを支える観光業界の皆さん、市民の皆さんがおもてなしをするというこの一連の動きの中で、改めて地域を見つめ直して、地域のアイデンティティを見つけ、そして地域への愛着や地域への誇りをさらに強くしていく。それは幸せな地域だろうし、一番の観光の目的なのかなと思う。いただいたご意見を参考にしながらやってまいりたい。DMOの話もあり、それは分析の仕方やデータをどう押さえるのか、それを踏まえた上で尖っていく、どこに尖るのが難しいところだと思う。そういったところを市が考える、そして実際にやられている事業者の皆さんが考えるという、この2つとはまた違うネットワークのハブがあって、そこが何かを考えるのが正しいやり方なのかもしれないし、今のような商工会議所と観光協会と行政が、観光アドバイザーの皆さんのご意見もいただいて進めていくこのスタイルで足りないのかどうかというのをよく見極めていかないといけない時が来ている。国や道の意見も聞きながら、色々と工夫していかなくてはならない。

クルーズ船の話も活発にいただいたが、クルーズ船そのものがおそらく景観の新しいものになってくると思う。長崎でも橋の下を通るクルーズ船が新しい夜景のコンテンツと言われている。大きく函館を変える起爆剤になってくれるのかなと思う。中国の買い物のクルーズが九州などに押し寄せているが、函館はそれとは違う。ヨーロッパを含め、欧米の方が多くいらっしゃるので、そういった方をどう迎えて、オプションツアーがどう組まれるとか、あるいはまち歩きをする方をおもてなしをする知恵が出てくると思う。欧米の方がいらっしゃるところにアジアの方が来るというのも一つステータスになっているので、そういったシナジーも生まれてくる。クルーズ船はこの地域を改めて考える良いきっかけになると思っている。色々と情報をいただきながらやってまいりたい。

奥平座長からクリスマスファンタジーの話もあり、確かに全くの民間から初められたもの。バル街の始まりもそうだし、今も自由な発想とユニークさで全国からも注目されているし、少し違うかもしれないが、映画でも海炭市叙景で1、200万円もの寄付を集められて、これも行政が関わっているものではない。若い人の力というところでは、黒船のイベントもあるし、遡れば夜景の日や野外劇もそうだ。市民力という言葉では片づけられない本当の文化である。おそらくこの人口のまちでこんなふうに色々なイベントが立ち上がって来るまちというのはそうない。このことをフェスティバルタウンと表現して、打ち出して行こうといううねりになればと思う。元々持っている力であり、これをもっと通年を通してやれるような形にする中で、相乗効果を生み、また、お金が落ちるような仕組みに繋げていければと思う。もちろんイベントを支えるボランティアの方もたくさんいらっしゃるだろうし、そうした中で、地域の人の関わり、あるいはそこに観光客の方も関わったり、あるいは外国人も関わったりしていく中で、大きな変化が生まれるきっかけにしていきたいと思っている。夜景の日

の役割という話もあったが、陸繋島があってトンボロの上に30万人も住んでいるようなまちは世界にもまれであり、こうしたところに暮らしているんだということの意味合いというか、だからこそたくさん観光客が来て、観光のまちなんだという意識、そういったことももう一度思い出すきっかけになる。非常に興味深く夜景の日の復活の話も聞かせていただいた。様々な場面で、色々な人と話をしていきたいと思っている。

その他、たくさんのお話をいただいたので、これからの行政運営の参考に是非させていただきます。

本日は本当に忌憚のないご意見をいただきまして、ありがとうございました。

■ 閉 会